

## Chalk はなぜ不可算名詞なのか (2)

—— 日本語と英語における「部分と全体」の捉え方について (2) ——

### Why is ‘chalk’ an uncountable noun? (2)

塩 濱 久 雄

キーワード：英語、可算名詞・不可算名詞、日本語

#### 要 約

筆者は、日本語にはない「可算名詞と不可算名詞の区別」「冠詞、限定詞」「時制」などが、なぜ英語には存在するのかは日本語と英語の間の「部分と全体の捉え方の違い」という観点から説明できると考えている。

前稿に引き続き、本稿では、「関係性」「比較」「場所、時間の特定」「時間の混在」という点から日英語の「部分と全体の捉え方の違い」を例証した。

#### 0. はじめに

拙稿「Chalk はなぜ不可算名詞なのか」(以下「Chalk-1」)で筆者は、物質名詞と分類される名詞の中でも、water のような名詞が不可算名詞であることは日本語話者にも直感的に理解できるが、chalk のような名詞が不可算名詞であることは、直感的には理解できない、という事実から、英語は「部分」を「全体」の中で捉える傾向が強いのに比して、日本語は「部分」を「全体」の中で捉える傾向が弱いという指摘を行った。

英語の chalk は、固体の時も、粉状や液状の時も chalk なので、これら状態のすべての場合を「全体」と捉え、たとえば、筆記用具の chalk の場合 (=部分) にはその一形態と考えて、a piece of chalk などと言う。

しかし、日本語の場合には、筆記用具の「チョーク」はその状態 (=部分) だけで考えれば、一本、二本と数えられるので、日本語話者には「可算名詞」と捉えられるのである。もちろん、グラウンドに線を引く場合に用いられる「チョーク」の場合には液体なので、日本語話者にも「不可算名詞」と捉えられる。

言うまでもないことであるが、名詞の「可算」「不可算」の区別は、日本語の名詞には存在しない。日本語の名詞とほぼ同じものを指す英語の名詞に照らし合わせてみて、その英単語が日本語話者にとって「可算」「不可算」のどちらに思えるか、ということである。

## 0 – (1)

「Chalk-1」では、(1)「空間」(2)「時間」(3)「動き」「移動」「方向」(4)「追加」(5)「限定」などの観点から「部分と全体」について考察を加えた。参考としてそれぞれの項目の代表的な例とそれに対する筆者のコメントを、以下に再掲しておく。

(1) 僕は山の中で大島さんに裸の身体を見られたことを思い出して、顔がもっと赤くなる。  
『カフカ』(上469)

I remember how Oshima saw me buck naked up at the cabin, and blush even more. (232)

(コメント)

「僕」は「山の中の小屋」にいるのであるが、それを原文は「山の中で」と表現しているが、英訳では at the cabin (山小屋で) となっている。つまり、原文は「山の中」で「山の中の一部」を表しているのである。

(2) 昨日の夜まではそんなところに鏡なんてなかったのに、いつの間にか新しくとりつけられていたんだな。「鏡」『全1 (5)』(77)

There wasn't a mirror there the night before, so they must have put in one between then and now.  
Blind Willow (59)

(コメント)

「いつの間にか」が between then and now (そのときと今の間に) と訳されている。上の「山の中」と同様であるが、時間に関する例である。

(3) 僕はまわりのそんな風景を眺めながらも何も考えずにただ一步一步足を前に運んだ。  
『ノルウェイ』(上281)

Moving ahead one step at a time, I thought of nothing but the scene passing before my eyes.  
(137)

(コメント)

「僕はまわりのそんな風景を眺めながらも何も考えず」が I thought of nothing but the scene passing before my eyes (目の前を通り過ぎて行く風景以外は何も考えなかった) と訳され、「風景」が the scene passing before my eyes と訳されている。

(4) 「うん」といこは言った。彼が話しだすのをしばらく待っていたが、話はいつまでたっても始まらなかった。「めくら柳」『レキシントン』(223)

“Mmm,” he said. I waited for him to say more, but he didn't. (14)

(コメント)

「話しだす」とあるが、すでに「うん」と言っているので、英訳では say more (さらに話す) となっている。

(5) 食べものならコンビニエンス・ストアで買える。『カフカ』(上17)

I can buy food at the local convenience store. (8)

(コメント)

「コンビニエンス・ストア」が the local convenience store (地元のコンビニエンス・ストア) と訳され、local が追加されている。

## 0 - (2) 追加例

以下、「Chalk-1」で扱った項目に、その後収集した例を追加する。

### (1) 「空間」

洗面所に入って手についた土を綺麗に洗い、サンドイッチをひときりだけ食べ、コーヒーを二杯飲んだ。『ダンス』(上41)

First, I washed the dirt from my hands then went into the restaurant. I could only manage a third of a sandwich, but I put down two cups of coffee. (10)

(コメント)

英文を和訳すると、「まず僕は手の土を洗い流し、それからレストランに入った。僕はサンドイッチを三分の一しか食べられなかったが、コーヒーは二杯飲んだ」となる。原文は「ひときり」とあるが、もとの「何切れ」あったのかは描写されていない。しかし、英訳は a third と「部分と全体」を意識した描写になっている。

僕はごく当たり前のものを見るように彼女を見ていたのだ。『ダンス』(80)

The girl just seemed a part of the place. (32)

(コメント)

これは、夜のホテルのバーに十二三歳の女の子がいるのを見て、違和感を持たなかったということを行っている場面である。原文のこの描写には周囲の状況が含まれていないが、英文は和訳すると、「その女の子は単にその場所の一部にすぎないように思えた」となる。

そして窓の外の雪のふりしきる茫漠とした暗闇を見ながらマティーニを飲み、エジプト人について考えた。『ダンス』(上151)

I nursed a martini while gazing out blankly at the flecks of white swirling down through the void. (70)

(コメント)

「雪のふりしきる茫漠とした暗闇を見ながら」が gazing out blankly at the flecks of white swirling down through the void (虚無の中を落ちていく白い斑点をぼやっと見つめて) と訳されている。「白い雪片」が見えているのに、その状況を「暗闇 (=darkness)」と表現するのは

おかしいと考えてこのような訳になったと思われる。

日本語は、「雪が見えている」ことと、その背景が「暗闇」であることを分けて認識していることになる。

(類例)

人々は白い息を夜の闇に浮かべながら僕の脇を通り過ぎていった。『ダンス』(上151)

People walked past, puffing white breathes into the air. (95)

(コメント)

この場合も「暗闇」は訳出されていない。筆者はこれらの例から芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蟬の声」を思い出す。

ドイツ・シェパードが立ったまま一匹入りそうなくらい大きなスーツケースだった。『ダンス』(上222)

Each could have held a full-grown German shepherd, standing. (107)

(コメント)

「ドイツ・シェパード」が full-grown German shepherd (十分成長したドイツ・シェパード) と訳され、full-grown が追加されている。つまり、「ドイツ・シェパード」の大きさには、成長しきった状態と、そこにいたるまでの大きさの段階があるが、英訳はこれを「部分と全体」の関係として捉えているのである。

結び目は電話局にある。『ダンス』(上257)

And all tied through the phone company switchboard. (125)

(コメント)

「電話局」が the phone company switchboard (電話局のスイッチ・ボード) と特定の訳されている。

馬鹿気た話だけど、ここの店のレタスがいちばん長持ちするのだ。『ダンス』(上263)

You may not believe this, but the lettuce you buy there last longer than lettuce anywhere else. (129)

(コメント)

「ここの店のレタス」が the lettuce you buy there (そこで買うレタス) と訳され、you buy が追加されている。これは、「ここの店のレタス全部」に関しての話ではなく「僕がここの店で買ったレタス」に関する話だからである。

手にケーキかクッキーかそういうものを持っている。『ダンス』(上264)

She's holding a container of cookies. (129)

(コメント)

原文にない container (容器) が追加されている。

## (2)「時間」

ねえ、僕はもう一度やりなおしてみたい。『ダンス』(上180)

You know, if I could, I think I want to pick up where I left off, years ago. (85)

(コメント)

英文を和訳すると、「ねえ、できればだけれど、僕は何年も前にやめた地点からやり直したい」となる。英訳は「どの時点からやり直すのか」が表現されている。

「月に帰りなさい、君」と言って僕のガールフレンドは去って行った。『ダンス』(上202)

“Go home to the moon!” were my last girlfriend's parting words. (96)

(コメント)

「僕のガールフレンド」が my last girlfriend (前のガールフレンド) と訳され、last が追加されている。

## (3)「動き」「移動」「方向」

沈黙はひどく重く、まるで深い深い穴の底にいるような気がした。『ダンス』(上180)

The silence weighed heavily as if we'd been plunged to the bottom of a very deep pit. (85)

(コメント)

「底にいる」が plunged to the bottom (底に落とされた) と訳され、「動き」が表されている。

彼女は新月のように淡く物静かな微笑を浮かべた。『ダンス』(上222)

Soft and silent as a new moon, a smile drifted across her face. (107)

(コメント)

「微笑を浮かべた」が a smile drifted across her face (微笑が顔を横切った) と訳され、「新月」が「移動」していることになっているが、筆者の読みでは、「微笑み」は動いていない。

途中でユキは一度洗面所に行った。そしてウォークマンの電池を入れ替えた。『ダンス』(上229)

Yuki went to the restroom, came back, changed the batteries in her Walkman. (110)

(コメント)

原文にない came back (戻ってきた) が追加されている。

高速道路のうなりは十二時を過ぎてもまだ途切れなかった。時折バイクの激しい排気音が鳴り響いた。『ダンス』(上261)

Already past midnight, but the drone of the expressway showed no sign of letting up. Every now and then a motorcycle would blast by. (127)

(コメント)

「鳴り響いた」が blast by (大きな音を立てて通り過ぎた) と訳され、移動が表されている。

それから相手は欠伸をしながら電話を切った。仕方ない。まだ朝の十時なのだ。『ダンス』(上263)

The guy yawned and hung up. Couldn't blame him. It was only ten-thirty. (129)

(コメント)

原文の「十時」が ten-thirty と訳されている。これは、「僕が電話をかけた」のが「十時」で、そのあと「相手」と話をしているので、時間がたっているはず、と訳者が考えたためと思われる。

彼は運転手に行き先を告げた。『ダンス』(上263)

He gave directions to the driver, and we were off. (135)

(コメント)

原文にない and we were off (そして僕たちは出発した) が追加されている。

#### (4) 「限定」

彼女は疲れていて、何処かで休みたかったのだろう、と僕は思った。僕はとまり木みたいなものなのだ。『ダンス』(上148)

She was tired. She needed somewhere to roost. I was the nearest tree branch. (68)

(コメント)

「とまり木」が the nearest tree branch (もっとも近くの木の枝) と訳されている。

### 1. 「部分と全体 (2)」

以下、前稿では扱われなかったテーマの例を集めた。

#### (1) 関係性のないところに関係性を見る

ここで扱われるのは、原文においては、ある二つの場面が独立して書かれているが、英訳に

おいて何らかの形で関係付けられている場合である。

これは、たとえば、俳句の「古池や蛙飛びこむ水の音」を「古池に蛙が飛びこんだので水の音がした」と言っているようなものである。

写真には羊の群れと草原が写っていた。『羊』(93)

The photo showed a flock of sheep on a grassy meadow. (73)

(コメント)

英文を和訳すると、「その写真には草原にいる一群の羊が写っていた」となる。これは、原文では「羊の群れ」と「草原」のふたつが写真に写っている、と表現されているのであるが、英訳者はその二つの間の関係性を表現したのである。

町は死んだように静かだった。老人が一人、シャベルでロータリーの雪をかきわけていた。やせた犬がその隣で尻尾を振っていた。『羊』(395)

The town was dead still. Except for an old man shoveling away the snow from the rotary and a gangly dog sitting nearby wagging its tail. (347)

(コメント)

英文を和訳すると、「一人の老人がシャベルでロータリーの雪を除けていて、ひょろ長い犬がそばに座って尻尾を振っているのを除いて、町は死んだように静かだった」となる。原文では、「町の様子」と「老人の雪かき」や「犬」と無関係として描写されている。

前の例の関係性は日本語話者にも感じ取れると思えるが、この例における関係性は筆者の読みにはない。

僕とカメラマンとで店を幾つか回り、僕が文章を書き、カメラマンがその写真を撮る。『ダンス』(上31)

A photographer and I were to visit a few restaurants. I'd write the story up, he'd supply the photos. (7)

(コメント)

「その写真を撮る」が supply the photos (写真を添えて完成させる) と訳されている。

別れた妻からの手紙も来た。手紙には幾つかの実際的な用事が書いてあった。『ダンス』(上35)

My ex-wife wrote, needing some practical affairs taken care of. (9)

(コメント)

英文を和訳すると、「前妻が、幾つかの実際的な用事进行处理する必要があったので手紙を書いてきた」となり、手紙と内容が関係づけられている。

カウンター席で女が何かを言い、男がまた笑った。『ダンス』(上104)

A woman at the counter said something, which drew another laugh from her companion. (44)

(コメント)

原文にない、which drew (それが引き起こした) が追加されている。「何かを言う」ことと「笑う」ことが関係付けられている。

(類例)

スチュワーデスがジュースを運んでやってきて、彼女の寝顔を見てとても眩しそうな顔をした。そして僕に向かって微笑んだ。僕も微笑んだ。『ダンス』(上104)

The stewardess brought around drinks, looked over at Yuki, and smiled broadly at me. I had to smile, too. (114)

(コメント)

「僕も微笑んだ」が I had to smile, too (僕も微笑まなくてはならなかった) と訳され、スチュワーデスの「微笑み」が僕の「微笑み」を引き起こしたことを表現している。

記事のタイトルは「札幌の土地疑惑。黒い手がうごめく都市再開発」とあった。空から写した完成間近のドルフィン・ホテルの写真も載っていた。『ダンス』(上122)

The title, “Sapporo Land Dealings: Dark Hands behind Urban Redevelopment. And printed alongside, an aerial photograph of the nearly completed new Dolphin Hotel. (53)

(コメント)

原文にない alongside (並んで) が追加され、「記事の横に写真がある」ということが表されている。

A 総業は政界にも巨大なパイプを持っていた。記者はもっと先まで追及した。『ダンス』(上123)

A Enterprises had a direct pipeline to certain political circles, which prompted the reporter to pursue this line of investigation further. (53)

(コメント)

英文を和訳すると、「A 総業はある政治的サークルに直接のパイプを持っていた。そのことが記者にさらに調査させた」となり、関係性が表現されている。

「大変だった？」

「まあまあ」と彼は少し考えてから答えた。たぶんかなり大変だったんだろうと僕は思った。

『ダンス』(上133)



“A lot of trouble?”

“Mmm, some,” he said after a slight pause, making it obvious that it had been extremely difficult.  
(59)

(コメント)

英文 2 行目の making 以下を和訳すると、「(少し間が開いたことは)それが非常に難しかった  
ということをはっきりと示していた」となる。

打ち付けられてからずいぶん年月がたっているのだろう。板の隙間に灰色のほこりが積もり、  
釘の頭が錆びている。『ダンス』(上169)

Boarded up a long time ago, if the rusty nails and gray dust in the cracks of the boards were any  
indication. (80)

(コメント)

英文を和訳すると、「錆びた釘や、板の隙間の灰色のほこりがしるしとなるのであれば、かな  
り前に打ち付けられたことになる」となる。

でも僕はまだ体をこわばらせたままじっと白いスクリーンを睨んでいた。『ダンス』(上213)

I remained in my seat, transfixed by the blank white screen. (102)

(コメント)

英文を和訳すると、「僕は白いスクリーンに釘付けにされ、座席にそのままだった」となり、  
「白いスクリーン」と「釘付け」との間の関係性が表されている。ただし、筆者の読みでは原  
文にこのような関係性はない。

彼女はボールペンの頭で机をとんとんと叩いただけで僕の質問には答えなかった。『ダンス』  
(上219)

She tapped her pen on the countertop in lieu of a response. (105)

(コメント)

英文を和訳すると、「彼女は返答の代わりにカウンターの上でペンをとんとんと叩いた」とな  
り、質問に対する返答として「叩いた」ことになっている。

それで僕はそのテープをセットした。まずサム・クックが「ワンダフル・ワールド」を歌った。  
『ダンス』(上232)

No sooner had I punched the PLAY button than Sam Cooke's "Wonderful World" came on.  
(112)

(コメント)

英文を和訳すると、「プレーボタンを押すとすぐにサム・クックの『ワンダフル・ワールド』が流れてきた」となる。

(逆の例)

ドアが自動的にしまったが、それでも僕はじっと壁にもたれていた。『ダンス』(上187)

The door closed. I did not move. (87)

(コメント)

「が、それでも」が訳出されていない。この場面は、「僕」が羊男の部屋を出て、エレベーターの中に入った直後の描写で、直前の文章は「そして音もなくドアが開き、明るい柔らかな光が廊下にこぼれて僕の体を包んだ。僕はエレベーターの中に入り、しばらく壁にもたれてじっとしていた」である。訳者には「ドアが自動的にしまった」ことと「僕はじっと壁にもたれていた」の間に「が、それでも」で表される関係があるようには思えなかったようであるが、筆者の読みでは原文は「ドアが自動的にしまったが、それでも（階数を示すボタンを押すことなく）僕はじっと壁にもたれていた」の意である。

## (2) 比較に関する表現

### (2) - 1 比較級

グルメ番組などで、複数の「有名店」を紹介するという場合の「有名店」を英訳する場合、私たちは「有名な」を *well-known* として、たとえば *well-known restaurants* としてしまいがちである。しかし、下の1例目を見てわかるように、*the more-well-known spots* と「比較級」で訳されている。日本語で「有名店」を紹介する場合、紹介されなかった店が「有名ではない」とは言っていないと考えられるが、英語には「店」全体の中の「より有名な方」という発想がある。

適当に有名店を選んで回るだけだ。中には何も食べないで原稿を書く人間もいる。『ダンス』(上53)

They do a handful of the more-well-known spots, cruise through without eating a thing. (17)

上手く説明できないけど、何かが変なの。『ダンス』(上106)

I really can't explain any better, but something isn't right. (46)

(コメント)

原文ではそれまで一応の「説明」をしてはいるので、「それより上手く」と比較級で訳されている。

役に立てなくて申し訳ないね。『ダンス』(上107)

Sorry I can't be of more help. (47)

(コメント)

原文ではここまで、相手の話をいろいろと話を聞いてあげているので、「まったく役に立たなかった」ということはないはずである。そこで、程度を考えて「現状より役に立てなくて」と比較級で訳されていると考えられる。

彼が気にしているのはF 4 ファントムの経済性についてだった。『ダンス』(上57)

He was more concerned about the economics of F4 Phantoms. (19)

(コメント)

彼が気にしていることは他にもいくつかあると考えられるので、「気にしている」が more concerned (より関心がある) と比較級で訳されていると考えられる。

他にやることも思いつかないのでまたしばらく外を歩いてみることにした。『ダンス』(上208)

At a loss for something better to do, I went out walking again. (99)

(コメント)

「他にやること」が something better to do (すべきより良いこと) と比較級で訳されている。つまり、「外を歩くことより良いこと」を思いつかなかったということが表現されているのである。

「目的地までどれくらいかかるのかな?」『羊』(97)

“How much longer till we get there?” (77)

(コメント)

原文では、車はもうすでに発車しているので、「どれくらい」が how much longer (あとどのくらい) と比較級で訳されている。これは、Chalk-1 で述べた「一生」が「一生の残り (the rest of one's life)」を指して用いられる場合があるのと同じである。

(参考例)

僕がそういう風に一所懸命やったのはそうすることが、僕にとってはいちばん楽だったからだ。『ダンス』(上45)

I went the extra step because, for me, it was the simplest way. (13)

(コメント)

「一所懸命やった」が went the extra step (もう一歩余計にやった) と訳されている。これは、「一所懸命やる」ということが、「普段にもましてがんばる」という比較意識をもって訳されて

いるからと考えられる。この例は下の (2) - 3 の例とも考えられる。

### (2) - 2 最上級

次例の場合、「大変なんだ」が the hardest part (もっとも困難な部分) と訳されている。これは「プログラムを組む」ということが一連の作業の「一部分」であって、その「部分」が「全体」の中で「もっとも困難」である、という訳になっている。

プログラムを組むのが大変なんだ。『羊』(394)

Constructing the program was the hardest part. (346)

でも最後にドルフィン・ホテルは奇妙な条件を出した。『ダンス』(上135)

In the end, the Dolphin Hotel came out with the strangest counteroffer. (60)

(コメント)

「奇妙な」が the strangest と最上級で訳されている。これは、昔の「ドルフィン・ホテル」の立ち退き交渉のなかで、色々のやり取りがあって、最後に出された「条件」であるので、最上級で訳されたものと考えられる。

自慢するわけじゃないけどね、あのシーンはよくできてたよ。リアルだった。『ダンス』(上282)

I don't mean to brag, but that scene was the best thing in the movie. It was real. (139)

(コメント)

「よくできてた」が the best thing in the movie (映画の中で最高) と最上級で訳されている。次の「リアル」が最上級でないことと比べると、この表現が理解できる。

### (2) - 3 程度

雪さえ積もらなきゃ、牧場まではジープで一時間半もありゃ着くんだよ。『羊』(298)

Summer lasts as long as the snow doesn't get too deep, and it's only an hour and a half to the ranch by jeep. (261)

(コメント)

英文前半を和訳すると、「雪があまりにも深くない限り夏が続く」となる。つまり、「雪が積もる」といっても、ジープが走れるくらいの雪の積もり方もあるはずである。そこで、英訳では「積もらなきゃ」を doesn't get too deep と訳しているのである。

羊男は何かを知っている。それは確かだった。『羊』（上350）

The Sheep Man knew something. That much was certain. (308)

（コメント）

英文後半を和訳すると、「そこまでは確かだった」となり、程度が表現されている。

僕は簡単に説明した。『ダンス』（上69）

I explained as simply as I could. (26)

（コメント）

英文を和訳すると、「僕はできるだけ簡単に説明した」となり、原文にない、as...as I could（できるだけ）が追加されている。「簡単さ」に程度を見ているのである。

（参考例）

『片想い』と彼は眉をしかめて、小さな声で言った『ダンス』（上280）

“Unrequited?” he said with a grimace, his voice dropping to a whisper. (137)

（コメント）

「小さな声で言った」が his voice dropping to a whisper（彼の声がささやき声になった）と訳され、変化が表されている。

懐かしきモダネアーズが懐かしきトミー・ドーシーの歌を歌った古いレコードを小さな音でかけた。僕の頭みたいになんまり時代遅れだった。そしてノイズも入っていた。でも誰にも迷惑はかけない。『ダンス』（上252）

I put on an old favorite of the Modernaires singing Tommy Dorsey numbers. Nice and low. A bit out-of-date, like my head. A bit scratchy, but not enough to bother anyone. (123)

（コメント）

最後の「そしてノイズも入っていた。でも誰にも迷惑はかけない」が A bit scratchy, but not enough to bother anyone（少し針音がするが人に迷惑をかけるほどではない）と訳されている。

### （３）場所の特定

原文において、場所が特定されていない場合に、その英訳において場所を表す表現が追加されている例を集めた。しかし、最後の参考例のように、筆者の読みと訳者の読みが一致しない場合もある。

樫の葉が何枚か煙突から入りこんでいた。『羊』（323）

A few oak leaves, having gotten in through the chimney, sat in the hearth. (283)

(コメント)

英文を和訳すると、「何枚かの檜の葉が煙突を通して、炉床にちらばっていた」となり、in the hearth が追加されている。

ある時にはそれは星印をつけた羊だったりもした。『羊』(345)

Other times it was the sheep with the star on its back. (305)

(コメント)

英文を和訳すると「また別の時にはそれは背中に星印をつけた羊だった」となり、on its back が追加されている。

「キー・ポイントは弱さなんだ」と鼠は言った。『羊』(380)

“The keypoint here is weakness,” said the Rat. (333)

(コメント)

引用符内を和訳すると、「ここでのキー・ポイントは弱さなんだ」となり、here が追加されている。

あるものは絶望的に虫に食われ、あるものはばらばらにほどけていた。『ダンス』(上170)

Some were worm-eaten, falling apart at their bindings. (80)

(コメント)

「ばらばらにほどけていた」が falling apart at their bindings (表紙のところでばらばらになっていた) となり、at their bindings が追加されている。

羊男の大きな影がしみのある壁の上で揺れていた。『ダンス』(上170)

Behind him, his disproportionately enormous shadow played over a grimy wall. (81)

(コメント)

原文にない behind him (彼の後ろで) が追加されている。

『ドルフィン・ホテル』という看板もちゃんと現実存在している。『ダンス』(上177)

Real as the Dolphin Hotel sign downstairs's real. (84)

(コメント)

原文にない downstairs (階下の) が追加されている。これは、ホテルの入り口にある『ドルフィン・ホテル』という掲示を訳者は思い浮かべていると考えられる。

僕はコートのジッパーをいちばん上までひっぱりあげて、マフラーを鼻の上でぐるぐると巻いた。『ダンス』(上208)

I zipped my coat all the way to the collar and wrapped my scarf around over my nose. (99)  
(コメント)

「いちばん上」が to the collar (襟まで) と特定の訳されている。

後ろの方で、からからからという瓶の転がる音が聞こえた。『ダンス』(上211)

I could hear the sound of an empty bottle rolling down the aisle. (100)  
(コメント)

「後ろの方で」が訳出されず、原文にない down the aisle (通路を下に) が追加されている。

丘の上に立って洪水の引いたあとを眺めるような目付きだった。『ダンス』(上222)

With the look of someone surveying the lowlands from a hill after the floodwaters have subsided. (107)  
(コメント)

原文にない、lowlands (低地) が追加されている。

どの便も出発が遅れているらしく、みんな一様に疲れた顔をしていた。『ダンス』(上228)

All flights out of Sapporo were delayed, and everyone looked uniformly on edge. (110)  
(コメント)

原文にない、out of Sapporo (札幌発の) が追加されている。

運が悪いだけののだろうか、それとももっと根本的な原因があるのだろうか? 『ダンス』(上228)

Was it just my luck or a fundamental flaw in me? (110)  
(コメント)

英文を和訳すると、「単に運だったのだろうか。それとも僕の中の根本的な欠陥だろうか」となり、in me が追加されているが、「運」も英訳では当然 my luck になるのであるが、自分のこととして英訳されている。

ユキは何も言わず肩をすぼめ、車のドアを開けた。そして噛んでいたチューインガムを植木鉢の中に捨てた。『ダンス』(上249)

Yuki shrugged and said nothing, then got out and dropped her wad of gum into a convenient potted plant. (121)

(コメント)

「植木鉢」が a convenient potted plant (近くの鉢植え) と訳されている。

主人公の女の子がやってくる。『ダンス』(上249)

The girl lead comes into frame. (129)

(コメント)

英文を和訳すると、「主人公の女の子がフレームに入ってくる」と訳され、into frame が追加されている。

(参考例)

時代は流砂の如く流れつづけるのだ。『ダンス』(上127)

The sand of the times keeps running out from under our feet. (56)

(コメント)

原文にない from under our feet (足もとから) が追加されている。これは、この文のあとに「我々の立っている場所は、我々の立っていた場所ではないのだ」があるからと考えられるが、筆者の読みでは、このような特定化はできない。

ユキはテーブルの向かい側からじっと僕を見ていた。何か珍しい生物でも見るみたいに。『ダンス』(上240)

She eyed me from across the table, as if she were looking at some rare species in the zoo. (116)

(コメント)

原文にない in the zoo (動物園の) が追加されているが、筆者の読みでは不要。

#### (4) 時間の特定

繋がっている、と僕は思った。『ダンス』(上211)

That's when I knew: We were all connected. (101)

(コメント)

英文を和訳すると、「その時僕はわかった：僕たちはみんな繋がっている」となる。

僕らは少しずつ仲良くなって、ビーチ・ボーイズの「サーフィン USA」のバックコーラスを二人でつけた。『ダンス』(上236)

By now, the two of us were chiming in on the back chorus of the Beach Boys' "Surfin' USA." (114)



(コメント)

原文にない by now (このころまでには) が追加されている。

「煙草の火とストーブに気をつけて」と僕は言った。『ダンス』(上251)

“Mind the cigarette and heater before you turn in.” (122)

(コメント)

原文にない before you turn in (寝る前に……………) が追加されている。

## (5) 部分と全体の取り違いによる誤訳と思われるもの

ここでは、「部分と全体」の捉え方が、筆者とは異なり、誤訳に思える例を集めた。

シートには古い反吐がこびりついてた。『羊』(18)

The seats all caked with vomit. (8)

(コメント)

英文を和訳すると、「シートはすべて反吐がこびりついてた」となるが、筆者の読みでは「すべてのシート」ではなく、描写の対象となったシートだけである。原文の「部分」の描写を「全体」ととった英訳になっている。

「先生は一週間前になくなったよ。とても立派な葬儀だったね。今東京はその後継者選びででんやわんやだよ」『羊』(392)

“The Boss died a week ago. We had a beautiful funeral. All Tokyo is turned upside down now. (345)

(コメント)

「東京」が all Tokyo (東京全体) と訳されているが、筆者の読みでは、この場合の「東京」は東京にあるこの先生の組織を指している。日本語では部分と全体の関係があいまいで、この場合はその一部分を「東京」という全体を表す語で表現している。

## (6) 時間の混在

ここでは、日本語において、同じことを表す表現が二度くりかえされていて、英訳において一度に変更されている例を挙げる。これは、原文が、特に段落の始めにおいて、見出し的にその段落の内容を一部書き記すという表現形式を、英訳者が不自然と感じていることを表しているのではないかと。そして、これも、「部分と全体」の捉え方の違いに起因する現象であると筆者は考える。つまり、「全体」の中の「一部分」が二度描写されるのは不自然なのである。

では、原文のこの繰り返しはどのような効果があるのかというと筆者の考えでは、「読み易

さ」のためである。

僕はウォッカ・ソーダを全部で四杯飲んだ。幾らでも飲めそうな気がしたが、きりがないので四杯でやめて、勘定書きにサインした。僕が立ち上がってカウンターを離れた時にも、その女の子はまだテーブル席でウォークマンを聴き続けていた。母親はまだ現れていなかったし、レモン・ジュースの氷はすっかり溶けてしまっていたけれど、彼女はそんなことは全然気にならないみたいだった。僕が立ち上がると、彼女はふと目を上げて僕を見た。そして二秒か三秒僕の顔を見てから、ほんの少しだけにつこりと微笑んだ。『ダンス』(上80)

I drank a total of four vodka-and-sodas. I could have drunk any number more but decided to call it quits. The girl was still in her seat, grafted to the Walkman. Her mother hadn't shown, and the ice in her glass had melted, while she didn't seem to notice. Yet when I got up from the counter, she looked up at e for two or three seconds, and smiled. (33)

(コメント)

「僕が立ち上がってカウンターを離れた時にも」が訳出されていない。これは、そのあとに「僕が立ち上がると、彼女はふと目を上げて僕を見た」とあるからと考えられる。つまり、原文においては、時間が混在していると訳者はとったのであろう。

それで、十二時前に仕事が終わって、私服に着替えて、十六階まで従業員用のエレベーターで上がったんです。十六階には従業員の仮眠室があって、私そこに本を忘れてきたからなの。別にそんなの明日でもよかったんだけど、まあ読みかけだったし、それにもう一人いっしょのタクシーで帰ることになっていた女の子の仕事がちょっと手間取ってたんで、だからまあいいやついでだからと思って取りに上がったの。『ダンス』(上97)

So after I changed clothes, I realized that I'd left my book in the staff lounge. I guess I could have waited until the next day, but the girl I was going to share the taxi with was still finishing up, so I decided to get it. I got in the employee elevator and punched the button for the sixteenth floor, which is where the staff lunge and other staff facilities are—we take our coffee break there and go up there a lot. (41)

(コメント)

最初のほうの「十六階まで従業員用のエレベーターで上がったんです」が訳出されていない。これは、最後に「取りに上がったの」があるからと考えられる。

「気がついたら、エレベーターのドアが開いていたの」と彼女は言って、肩をちょっとすくめた。「ドアが開いて、そこから懐かしい電灯の光がこぼれていたの」『ダンス』(上104)

“The next thing I knew, the elevator was there,” she said, shrugging her shoulders. “The door

opened and I could see the nice familiar light.” (45)

(コメント)

引用符内の英文を和訳すると、「次に気づくとエレベーターがそこにいたの。ドアが開いておなじみの素敵な光が見えたの」となる。これは原文で「ドアが開いた」が繰り返されているのを不自然と訳者が考えたからと思われる。

次にタクシーを拾って図書館に行った。札幌でいちばん大きい図書館に行ってくれということちゃんと連れていってくれた。『ダンス』(上122)

Then I got in a taxi and told the driver to take me to the biggest library in Sapporo. (52)

(コメント)

英文を和訳すると「次にタクシーを拾って札幌でいちばん大きい図書館に行ってくれと言った」となる。原文では「図書館に行った」が繰り返されているが、英訳では繰り返しが避けられている。

まず第一に、この問題はもうぴったりと蓋をされてしまっている。蓋をされて、紐でしばられて、金庫の中に入ってる。『ダンス』(上133)

I suppose you could say the lid was shut pretty tight on this one. And not just shut, it was bolted down and locked away in a vault. (59)

(コメント)

英文を和訳すると「この場合蓋はとてもぴったりと閉じられている。ただ閉じられているのではなく、ボルトを打たれ、金庫の中に入っている」となる。英訳では「蓋をされて」の繰り返しが避けられている。

僕は札幌の駅につくと、ぶらぶらいるかホテルまで歩いてみることにした。風のない穏やかな午後だったし、荷物はショルダーバッグひとつだけだった。街の方々に汚れた雪がうずたかく積み上げられていた。空気はぴりっと張り詰めていて、人々は足元に注意を払いながら簡潔に歩を運んでいた。女子高校生はみんな頬を赤く染めて、勢いよく白い息を空中に吐き出していた。その上に字が書けそうなくらいはっきりとした白い息だった。僕はそんな街の風景を眺めながら、のんびりと歩いた。『ダンス』(上58)

Arriving at Sapporo, I decided to take a leisurely stroll to the hotel. It was a pleasant enough afternoon, and I was carrying only a shoulder bag.

The streets were covered in a thin layer of slush, and people trained their eyes carefully at their feet. The air was exhilarating. High school girls came bustling along, their rosy red cheeks puffing white breathes you could have written cartoon caption in. I continued to amble, taking in the

sights of town. (20)

(コメント)

原文の初めに「ぶらぶら～歩いてみることにした」とあり、最後に「のんびりと歩いた」とある。英訳は「歩く」をそれぞれ *take a stroll*, *amble* と訳しているが、問題は最後の *continued* (続けた) である。この例では、繰り返しが避けられているのではなく、連続した動作と考えられているのである。「のんびりと歩いた」が *continued to amble* (のんびりと歩きつづけた) と訳されている。

## 引用文献

### (1) 原作

末尾の ( ) 内は、本稿で用いた略

- 村上春樹 (1982) 『羊をめぐる冒険』(羊) 講談社  
(1987) 『ノルウェイの森』(ノルウェイ) 講談社文庫  
(1987) 『ダンス・ダンス・ダンス』(ダンス) 講談社文庫  
(1996) 『レキシントンの幽霊』(レキシントン) 文藝春秋  
(2005) 『海辺のカフカ』(カフカ) 新潮文庫  
(1990-91) 『村上春樹全作品1979-1989』(全1) 講談社  
(2002-3) 『村上春樹全作品1990-2000』(全2) 講談社

### (2) 英訳

- Haruki Murakami (1989) *A Wild Sheep Chase* (Kodansha)  
(1994) *Dance, Dance, Dance* (Kodansha)  
(1993) *The Elephant Vanishes* (Vintage paperback)  
(2000) *Norwegian Wood* (Vintage paperback)  
(2005) *Kafka On The Shore* (Knopf)  
(2006) *Blind Willow, Sleeping Woman* (Vintage paperback)

## 参考文献

- 塩濱久雄 (2007) 『村上春樹はどう誤訳されているか』(若草書房)  
(2007) 『「ノルウェイの森」を英語で読む』(若草書房)  
(2008) 『村上春樹を英語で読むー海辺のカフカ』(若草書房)  
(2008) 「Chalk はなぜ不可算名詞なのか」(神戸山手大学紀要 9 号)